

ダニエルの書 - 第二百二十三号

ダニエル書11章40節の預言的意義を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-08

ダニエル書11章40節は、ダニエル書8章14節と同様に、神の御言葉の中でも最も深遠な節の一つである。40節はヒデケル川によって表され、ウライ川はダニエル書8章14節を表している。

第40節は「そして、終わりの時に」という言葉で始まり、したがってこの節の起点が1798年であることを明確に示している。この節の51語は1989年に封印が解かれ、当時のソ連崩壊を指し示すものとして認識された。その節にある51語は、1798年の「終わりの時」と、さらに1989年のもう一つの「終わりの時」の双方を表している。アルファでありオメガである方は、見て聞こうとするすべての者のために、その節にご自身の印を押された。第一と第三の天使の運動における終わりの時が、その一つの節の中に表されている。

次の節は、北の王として表される教皇権が、麗しの地として表されるアメリカ合衆国を、アメリカ合衆国で間近に施行される日曜法の時に征服するのがいつかを示している。ゆえに、四十節の言葉は、開始点として1798年の「終わりの時」を、終点として1989年の「終わりの時」を示してはいるが、実際には、四十節に表されている預言史は、北の王が麗しの地を征服する四十一節まで完結しない。これは、1989年のソ連崩壊から、四十一節にある間近に迫る日曜法に至るまでの歴史が、ロナルド・レーガン大統領の時代から間近に迫る日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の歴史を表していることを意味する。その歴史には2001年9月11日が含まれ、その後、黙示録第十一章の大地震の時に至るまでが含まれている。

その聖句の封印が最初に解かれたとき、次の真理に反対する主張が持ち上がった。「ピッペンジャーの、当該の聖句が1798年から日曜法に至る歴史を表しているという主張は馬鹿げている。なぜなら、聖書の聖句がそのように長い期間の歴史を表すことは決してないからだ。」私たちは、一つの聖句に収められうる期間の長さに限度があるのかどうかということについては考えていなかったが、黙示録十三章十一節がまさに同じ歴史を、ただ一節で示していることをすぐに思い出した。地の獣の歴史は1798年に始まり、地の獣が龍のように語ることは、間もなく来る日曜法において成就する。

そして、教皇制が力をそがれ、迫害をやめざるを得なくなったとき、ヨハネは、竜の声に呼応し、同じ残酷で冒瀆的な行いを推し進める新しい勢力が台頭するのを見た。教会と神の律法に戦いを挑む最後のこの勢力は、小羊のような角を持つ獣として象徴された。『時のしるし』1899年11月1日

技術的に言えば、40節は1798年から41節に至るまでの歴史を扱っており、41節で日曜法が特定されます。したがって、黙示録13章の単一の節で完結しているのとは異なり、日曜法が次の節にあるため、40節が扱う範囲は実際には少し短いのです。これに対し、黙示録13章では、1798年から日曜法までが一つの節に収められています。ホワイト夫人は、ダニ

エル書にある「同じ預言の系列」が黙示録で取り上げられていると私たちに教えており、行に行を重ねる原則を適用するなら、黙示録13章11節は容易に40節の上に重ね合わせることができます。

“line upon line”の原則を用いると、四十節で「戦車、船、騎兵」として表されている黙示録13章の地から上ってくる獣（アメリカ合衆国）が、1798年には二本の角を持つ子羊のような獣であったのが、間もなく来る日曜法の時には竜のように語る獣へと変わること、また、その子羊のような獣には二本の角があることが分かる。

四十節はまた、ツロの淫婦が忘れ去られている象徴的な七十年をも表している。というのも、その象徴的な七十年は「一人の王の日数」に等しく、王は王国を意味するからである。四十節と黙示録13章の記述に基づけば、イザヤ書23章の象徴的な七十年のあいだ支配する聖書預言における王国は、力を示す二本の角を持つ地から上ってくる獣である。地から上ってくる獣は、共和主義とプロテスタント主義を表す二本の角から始まるが、四十節の歴史が四十一節での成就に近づくにつれて、その二つの預言的な強みは「船」（経済力）と「戦車と騎兵」（軍事力）であると特定される。

イザヤ書第二十三章の象徴的な七十年の間、四十節では北の王であるツロの淫婦は、忘れ去られている。しかし、その象徴的な七十年の終わりには、彼女は再び地の王たちと姦淫を行うだろう。これは、ソ連を打倒するためにレーガン大統領が聖書の預言における反キリストと秘密の同盟を結んだ、とすべての歴史家が確認している、ソ連崩壊へと至る歴史の中で行われたことと同様である。1989年に至るまでの時期には、レーガンはすでに不法の人との秘密の不義の関係を始めており、こうしてネブカドネザルの楽人たちは、忘れ去られた淫婦が歌い始めていた曲を練習し始めた。まさにその歴史の中で、ジョン・ポール2世の前例のない世界的な働きが、「全世界」が「その獣に驚嘆して従った」という「歌と踊り」の始まりとなった。

第四十節はまた、ラオデキア的アドベンチズムの歴史を表している。これは1798年にサルデスとして始まり、サルデスにいた者たちが封印が解かれた光を受け入れ、そこからフィラデルフィアの運動が生まれた。フィラデルフィアの運動が1856年の光を拒んだとき、彼らは1863年に運動からラオデキアの教会へと移行した。したがって、その教会は四十一節、すなわち間もなく来る日曜法において、主の口から吐き出される運命にある。第四十節は、アメリカ合衆国の歴史だけでなく、ラオデキア的アドベンチズムの歴史も表している。

ラオデキア的アドベンチズムには、そのよりどころと力として神の御言葉の神聖な光が与えられ、アメリカ合衆国政府には、そのよりどころと力としてアメリカ合衆国憲法の神聖な光が与えられた。彼らはどちらも1798年に預言的に角として始まり、七十の象徴的な年の終わりまでに、背教的な共和主義の角と背教的なプロテスタントの角が一つの角となって結び合い、竜のように語るようになる。

第40節の二本の角は政府と選ばれた教会であり、それは一つの獣に生えた二本の角として表されていることからわかるように、並行して進む二つの預言の筋を表している。獣がどこへ行くにも二本の角もまた共に行き、それは同じ預言史の中で起こる。プロテスタントの角は、ラオデキアとフィラデルフィアによって表される二重の預言的性質をもつ

ている。共和主義の角もまた、共和党と民主党という政党によって表される二重の預言的性質をもっている。ダニエル書8章によれば、角がもつ二重の性質のそれぞれにおいて、第二のものはあとから生え、より高くなる。

そのとき、私は目を上げて見ると、見よ、川の前に二本の角を持つ雄羊が立っていた。二本の角はともに高かったが、一方は他方よりも高く、その高い方は後から生えた。
ダニエル書 8:3.

それぞれの角の二重の特性は、キリストの歴史においてサドカイ人とパリサイ人によって示されており、共和主義の角ではリベラリズム（奴隷制支持、デモクラシー、ウォーク主義、グローバリズム）と保守主義（奴隷制反対、立憲共和国、伝統主義者、MAGA）に相当する。プロテスタントの角の二重の特性は、フィラデルフィアとラオデキアに相当する。二つの角が二重の象徴へと分けられることについては、両者のあいだに完全な対応があるわけではない。というのも、パリサイ人とサドカイ人が十字架において一致したように、進歩的リベラリズムも保守的MAGA主義も日曜法の問題で正しい側に立つわけではないからである。しかし、十字架によって予型化されたやがて来る日曜法においては、ラオデキアは主の口から吐き出され、フィラデルフィアの角が旗印として掲げられる。それでも、両方の角の二重の性質はパリサイ人とサドカイ人のあいだの神学的論争によって表されており、キリストの歴史において異邦人への使者であった（パウロ）は、かつてパリサイ人の中のパリサイ人であった。

後の雨の方法論は行に行を重ねるものであり、それを適用すると、四十節において大いなる光が生み出される。黙示録2章から18章は、いずれも四十節と一致している。イザヤ書23章におけるツロの淫婦の証しも、その節と一致している。もちろん、四十節の上に重ね合わせるべき他の箇所はいくつもあるが、おそらく四十節に対する最も重要な行に行の適用は、四十節そのものだ。

四十節では、1798年の終わりの時と1989年の終わりの時が、共に提示されている。これは、預言を学ぶ者に、1989年の終わりの時の上に1798年の終わりの時を重ね合わせるよう導く。そうすると、四十節に描かれた歴史は、いずれも1798年に始まり、間もなく到来する四十一節に記される日曜法にまで続く二本の線を生み出す。1798年に始まる線は神の終末の民の内部的なメッセージを示し、1989年に始まる線はまさに同じ歴史の中での神の終末の民の外部的なメッセージを示す。ゆえに四十節は、黙示録の七つの教会と七つの封印における内的・外的な同一の預言的關係によって表される象徴性を、自らのうちに内包している。そしてこの預言的現象は、わずか五十一語から成る一つの節の中に表されている！

ミラー派は、七つの教会と七つの封印に内的・外的なメッセージがあることを認識していたが、七つのラッパも、七つの教会と七つの封印によって表される歴史の一要素である第三の真理の系統を表していることも認識していた。ラッパは、ミラーの言うところでは、ローマに下された「特別な裁き」であった。ミラー派は、七つのラッパで表される神の裁きが、七つの教会の歴史と、それに並行する七つの封印の歴史に結びついていてと理解していた。

第40節には2001年9月11日の歴史が含まれており、したがって第40節において七つのラッパの預言の系統もまた位置づけられる。第一の天使は1798年に到来し、1844年に裁きの開始を告知するためであった。その裁きは調査審判と執行審判に区分される。第40節の歴史は調査審判の歴史であり、ミカエルが立ち上がり最後の七つの災いが注がれるまでの第41節以降の歴史は、執行審判の歴史である。

執行の裁きは、アメリカ合衆国が竜のように語る時に始まる。

象徴における子羊のような角と竜の声は、かくして表されている国家における標榜と実践との間に著しい矛盾があることを指し示している。国家が「語る」とは、その立法および司法当局の行為を指す。そのような行為によって、この国は、自らの政策の基礎として掲げてきた自由で平和的な原則が偽りであることを示すことになるだろう。「竜のように語り」「第一の獣のすべての権威を行使する」との預言は、竜と豹のような獣によって表されている諸国が示した不寛容と迫害の精神が台頭することを、明白に予告している。そして、二本の角を持つ獣が「地とその上に住む者たちに第一の獣を拝ませる」という記述は、この国の権威が、教皇制への敬意の表明となる何らかの遵守を強制することにおいて行使されることを示している。『大争闘』443。

アメリカ合衆国が「語り」、間もなく来る日曜法を強制するとき、ヨハネの黙示録18章の「第二の声」は、男女にバビロンから出るよう呼びかけることで「語る」。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」ヨハネの黙示録 18:4-6

四十一節においてアメリカ合衆国が語る時、黙示録十八章の「第二の声」が語られると、なお現代バビロンの三重の環境の中にいる者たちが召し出される。そのときに召し出される者たちは、四十一節では「エドム、モアブ、そしてアンモンの子らの長」として表されている。その節では、現代バビロンの三重の象徴で表されている者たちは、北の王（教皇制）の手から逃れる。ヘブライ語の「逃れる」という語は、滑るようにして逃れることを意味し、その本来の意味は、その逃避が、逃れる以前に彼らを捕囚状態に置いていたものからの解放として成し遂げられる、ということである。

彼はまた栄光の地に入り、多くの[国々]が打ち倒されるであろう。しかし、エドムとモアブとアンモンの子らの首長は彼の手から逃れるであろう。彼はまた諸国に手を伸ばし、エジプトの地は逃れないであろう。ダニエル書 11:41, 42。

四十二節では、教皇権（北の王）が、国際連合を象徴するエジプトを征服するとき、第三の地理的障害を打ち破る。これはヘロデの誕生日を型として示されており、彼がヘロデヤ（教皇権）の娘であるサロメ（アメリカ合衆国）の欺瞞的な踊りに屈したときである。これは、国際連合（黙示録17章の「十人の王」）が、一時間のあいだ自分たちの王国を獣に与えることに同意する時を示している。その一時間とは、黙示録11章の「大地震」の時であり、またバビロンの大淫婦が裁かれる「時」である。四十二節では、エジプト（国際連合）は「逃れ得ない」。

第四十二節で「逃れる」と訳されているヘブライ語の語は、第四十一節のものとは異なる。第四十二節における「逃れる」は「解放を得られない」という意味だが、第四十一節は、間もなく到来する日曜法の前に教皇制と手を取り合っていた者たちが、するりと逃れ出るかのように逃れることを指し示している。日曜法危機に先立って、現代バビロンの交わりにいる者たちは、日曜日が神の礼拝の日であるというサタンの考えを受け入れてきた。獣の刻印が強制されると、人は何らかの理由でそれを受け入れることもあれば、それが正しいと実際に信じることもある。それを信じることは額に刻印を受けることであり、単に受け入れることは手に刻印を受けることである。

日曜法の際に教皇権の手から逃れる者たちは、アメリカ合衆国と国際連合がローマの大淫婦、すなわち教皇権、北の王と手を結ぶまさにその時に、神の礼拝の日は太陽の日であるというサタンの考えを拒絶する。

「米国のプロテスタントは、隔たりを越えて手を差し伸べ、心霊主義の手を握ることにおいて先頭に立つだろう。彼らは深淵を越えて手を伸ばし、ローマの権力と手を結ぶだろう。そしてこの三者連合の影響のもとで、この国は良心の自由を踏みじめる点でローマの跡を追うことになる。」『大論争』588。

四十節の考察を進めるにあたり、ダニエル書11章の最後の六節の構造を示しておくことが重要である。北の王、すなわち現代ローマは、地上の王座に据えられるために三つの地理的障害を征服する。異教ローマも教皇ローマも三つの地理的障害を征服したので、現代ローマは四十節で南の王（旧ソビエト連邦）を、四十一節で栄光の地（アメリカ合衆国）を、四十二節と四十三節でエジプト（国際連合）を征服する。

しかし、先のホワイト夫人の引用が示すように、アメリカ合衆国は教皇権および国連と同時に手を組む。竜と獣と偽預言者からなる三者連合は、間もなく到来する日曜法において成就するが、ダニエル書11章41-43節は、その同時の征服を順に示している。示されている順序は出来事の流れを表しているが、それらはすべて間もなく到来する日曜法において成就する。

その時点で、ヨハネの黙示録18章の「第二の声」が、ちょうどアメリカ合衆国が「語る」その場所で「語る」。神は、サタンが語るところで、また語る時に語る。44節では、東と北からの知らせが北の王を悩ませ、最後の教皇制による流血の惨事が開始される。44節は、42節と43節と同様に、41節に始まる。すなわち、ヨハネの黙示録18章の力ある御使いが、ほかの群れにバビロンから出て来るよう呼びかけを始めるときである。

彼が提示するメッセージは、第三の災いとしてのイスラムを、彼の裁きの器、そしてバビロンの大淫婦への懲罰として特定するものである。イスラムは「東からの知らせ」として、教皇制（偽の「北の王」）は「北からの知らせ」として表されている。ダニエル書11章40節は調査審判を指し示し、41節から45節は執行審判を指し示す。

次回の記事で、ダニエル書11章40節の考察を続けます。

あるときニューヨーク市にいた私は、夜のさなか、天に向かって階を重ねてそびえ立つ建物を見るよう促された。これらの建物は耐火であると保証され、所有者や建設者の栄光を示すために建てられていた。さらに高く、なお高くとこれらの建物はそびえ

、その建造には最も高価な材料が用いられていた。これらの建物の持ち主たちは、「どのようにすれば最もよく神の栄光を現せるのか」と自問してはいなかった。主は彼らの思いの中にはなかった。

私は思った。「ああ、このように自分の財を投じている人々が、神がご覧になるように自分たちの歩みを見ることができたなら！ 彼らは壮麗な建造物を次々と築いているが、宇宙の支配者の御目には、彼らの計画や企てがなんと愚かなことか。彼らは、心と思いのすべての力を尽くして、いかにして神の栄光を現すかを求めてはいない。これこそ人間の第一の務めであるのに、それを見失っているのだ。」

これらのそびえ立つ建物が建てられていくにつれ、所有者たちは、自己の欲を満たし隣人の羨望をかき立てるために使える金を持っていることに、野心に満ちた誇りで喜び勇んだ。彼らがそのように投じた金の多くは、強圧的な取り立てや、貧しい者を虐げて搾り取ることによって得られたものだった。天では、あらゆる商取引が記録されていることを彼らは忘れていた。不当な取引も、あらゆる詐欺行為も、そこに記されている。やがて、人々はその詐欺と傲慢のうちに、主がこれ以上は越えることを許されない一線に達し、ヤハウエの忍耐には限度があることを知るだろう。

次に私の前に現れたのは、火災の警報だった。人々は高くそびえ、耐火だとされている建物を見て、「完全に安全だ」と言った。だがこれらの建物は、まるでタールでできているかのように焼き尽くされた。消防車は破壊を食い止めるために何もできなかった。消防士たちは消火ポンプを操作することができなかった。

私は、主の時が来ても、高慢で野心に満ちた人間の心に何の変化も起こっていなければ、救うに力ある主の御手が滅ぼすにも力あることを、人々は知るだろうと教えられている。地上のいかなる力も神の御手をとどめることはできない。神の律法を顧みず、利己的な野心を追い求めた人間に報いを下すべく神の定められた時に、どのような建築材料を用いて建物を建てても、それらを滅びから守ることはできない。

教育者や政治家の間でさえ、社会の現状の根底にある原因を理解している者は多くない。政権を握る者たちは、道徳的腐敗、貧困、窮乏、犯罪の増加という問題を解決することができない。彼らは、経済活動をより確かな基盤に据えようとむなしく努力している。もし人々が神の言葉の教えにもっと耳を傾けるなら、人々を悩ませる諸問題の解決策を見いだすだろう。

聖書は、キリストの再臨直前の世界の有様を描写している。強奪や搾取によって巨万の富を蓄える者たちについては、次のように記されている。「あなたがたは、終わりの日のために宝をため込んだ。見よ、あなたがたの畑を刈り取った労働者の賃金、すなわちあなたがたが不正に差し止めたその賃金が叫んでいる。刈り取った者たちの叫びは、万軍の主の耳に届いている。あなたがたは地上で快樂にふけり、放縱に過ごし、屠殺の日のように自分の心を肥やした。あなたがたは義人を罪に定め、殺した。彼はあなたがたに抵抗しない。」ヤコブの手紙 5:3-6。

しかし、次々に成就しつつある時のしるしが発している警告を、いったい誰が読み取っているのか。世の人々にはどんな印象を与えているのか。彼らの態度にどんな変化が見られるのか。ノアの時代の住民の態度と少しも変わらない。世の営みや快樂に没頭していた洪水前の人々は、「洪水が来て彼らをことごとくさらって行くまで、知らなか

った」。マタイ 24:39. 彼らは天からの警告を与えられていながら、聞こうとはしなかった。そして今日、神の警告の声をまったく顧みることなく、この世は永遠の滅びへと急ぎ進んでいる。

世界は戦争の気運にかき立てられている。ダニエル書11章の預言は、ほとんど完全な成就に達しつつある。まもなく、預言で語られている苦難の出来事が起こる。

『教会への証言』 第9巻 11ページ